Yokohama Choral Society

横浜合唱協会
第68回定期演奏会

2018年6月17日(日)
横浜みなとみらいホール・大ホール
主催：横浜合唱協会

横浜合唱協会　第68回定期演奏会

モーツァルトとメンデルスゾーン

―バッハを継承した二人の若き天才―

◆F.メンデルスゾーン・バルトルディ(1809～1847)◆

詩篇 42 番『鹿が谷川の水を慕い求めるように』

Der 42.Psalm Wie der Hirsch schreit nach frischem Wasser op.42

指　　揮：柳嶋　耕太
ソプラノ：本宮　廉子

―― 休　憩 ――

◆W.A.モーツァルト(1756～1791)◆

ミサ曲　ハ短調

Messe c-Moll K.427

指　　揮：山神　健志
ソプラノⅠ：本宮　廉子
ソプラノⅡ：北條　加奈
テノール：谷口　洋介
バ　　ス：佐野　正一

管弦楽：東京バッハ・カンタータ・アンサンブル
合　　唱：横浜合唱協会

ごあいさつ

本日は横浜合唱協会第68回定期演奏会にご来場いただき誠にありがとうございます。

今回は「モーツァルトとメンデルスゾーン －バッハを継承した二人の若き天才－」というテーマです。意外なことにバッハの死後、彼の音楽は時代遅れとして世間一般から忘れ去られていましたが、この二人はその音楽の素晴らしさを知る機会を得、自身の音楽に取り入れることでさらなる高みへと到達したのです。軽やかさと重厚さが交じり合った傑作を是非ご堪能下さい。

さらに、本日は二人の若き指揮者が登場いたします。3年前から当会を指導いただいている山神健志氏と、昨年10月ドイツから凱旋帰国した新進気鋭の柳嶋耕太氏です。お二人の競演にもご注目ください。

当会は、昨年日独ジョイントコンサートを開催し、また一つ活動の場を広げました。そして来る2020年には設立50周年を迎えます。横浜で本格的な合唱をと願うメンバーによって、魅力的な活動を展開してまいりますので、今後とも引き続き皆様方のご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

2018年6月17日

横浜合唱協会 代表　清水　光洋

プロフィール

山神 健志（やまがみたけし／指揮）

1973年生まれ。自由学園最高学部卒業、東京藝術大学卒業後イタリアに留学。帰国後、合唱指揮者として活動を開始。現在は児童合唱から大規模な混声合唱まで多くの合唱団の常任指揮者を務めるほか、各地で市民参加による公募合唱団を指導。最近ではベートーヴェン『第九』（指揮：ヤクブ・フルシャ）、ドヴォルザーク『スタバト・マーテル』（指揮：広上淳一）、ヴェルディ『レクイエム』（指揮：三ツ橋敬子）、ブラームス『ドイツ・レクイエム』（指揮：広上淳一）の合唱指揮を担当。2017年にはアンドレア･バッティストーニ指揮ヴェルディ「レクイエム」にて250人の合唱団をまとめ、好評を博す。その的確な指導は競演した内外の指揮者や合唱団から信頼を得ている。また、オーケストラと歌う素晴らしさを子供から大人まで広く体験してもらおうと精力的に活動し、これまでにジョン・ラッターの『子どもたちのミサ』（オーケストラ版日本初演）、上田真樹『あらしの夜に』（オーケストラ版委嘱初演）をはじめ、多くのコンサートを企画、指揮している。バロック音楽から現代まで、幅広い活動の中でも、特にオケ付き宗教音楽での評価が高い。今後の活躍が期待されている指揮者である。

柳嶋 耕太（やなぎしまこうた／指揮）

2011年に渡独。マンハイム音楽・表現芸術大学指揮科合唱専攻を経て、ザール音楽大学指揮科合唱指揮専攻を卒業。在学中から、オッガースハイム聖セシリア教会合唱団専任指揮者、ザール福音派合唱協会客演指揮者を務める。2013年度ドイツ連邦教育研究省奨学生。2015年、ドイツ若手指揮者の登竜門であるドイツ音楽評議会・指揮者フォーラム研究員に日本人として初めて選出、同時にCarus出版より“Bach vocal”賞を授与される。以来、ベルリン放送合唱団、北ドイツ放送合唱団、ザールブリュッケン室内合唱団をはじめとするドイツ国内各地の著名プロ／セミプロ合唱団を指揮。

合唱指揮をゲオルク・グリュン、指揮を上岡敏之、声楽をアンネ=カトリーン・フェティクの各氏に師事。Projektchor Philharmonia指揮者。vocalconsort initium指揮者。室内合唱団vox alius音楽監督。2017年10月に完全帰国。国内での今後の活動が期待されている。

本宮 廉子（もとみやきよこ／ソプラノⅠ）

千葉県出身。日本大学芸術学部音楽学科卒業。同大学院修了。フランスにて夏期国際アカデミーを受講。ヘンデル「メサイア」「Dixit Dominus」、バッハ「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」、ハイドン「ネルソン・ミサ」、モーツァルト「ハ短調ミサ」「戴冠ミサ」、ベートーヴェン「荘厳ミサ」「オリーブ山上のキリスト」、ブラームス「ドイツレクイエム」、フォーレ「レクイエム」、プーランク「グロリア」など主に宗教曲のソリストとして多く出演するほか、フランス歌曲、日本歌曲を中心とした演奏活動を行う。「レクイエム」（上田益作曲）を2012年プラハにて、2014年ウィーン聖シュテファン大聖堂にて演奏。丹羽勝海、酒井伊吹子の各氏に師事するほか、L.ヌバー、D.ボールドウィン、E.アメリンク、R.ランドリー諸氏のレッスンを受講し研鑽を積む。モーツァルト・アカデミー・トウキョウ（MAT）、ヘンデル・フェスティバル・ジャパン（HFJ）室内合唱団メンバー。日本ヘンデル協会、セヴラック協会、セルクルY会員。

プロフィール

北條 加奈（ほうじょうかな／ソプラノⅡ）

東京藝術大学声楽科卒、同大学院修士課程を修了。中学校在学中、合唱部に所属したことを機に、声楽の勉強を開始。以後、国内外の合唱コンクールに出場し、数々の入賞経験を経て、声楽とアンサンブル双方の研鑽を積み重ねる。その長い経験で培われた合唱・発声指導は非常に高く評価されており、ヴォイストレーナー・合唱指揮者として、児童合唱団からシニア層まで、年代を問わず数多くの合唱団体の指導にあたっている。また、演奏会ソリストとして、宗教曲から演歌・ポップスのアレンジ曲など、ジャンルを問わない幅広い声楽レパートリーを持ち、日本各地の合唱団体やオーケストラと共演。その柔軟な声から生まれる豊かな表現はいずれも高い評価を得ている。著書に「合唱エクササイズ 表現編　HOJO METHOD①～③」（カワイ出版）、「必ず役立つ合唱の本 ボイストレーニングと身体の使い方編（監修:相澤直人）」（ヤマハミュージックメディア）。「ヤマハデジタル音楽教材 合唱練習」発声法監修。NHK東京児童合唱団ヴォイストレーナー・講師。

谷口 洋介（たにぐちようすけ／テノール）

神奈川県横浜市出身。国立音楽大学声楽科卒業。声楽を宮崎義昭、中村健、大石正治の諸氏に師事。オペラ歌唱をヒサコ・タナカに師事。古楽歌唱をジョン・エルウィス、ゲルト・テュルクの諸氏に師事。1998年以来、鈴木雅明主宰のバッハ・コレギウム・ジャパンのメンバーとして国内外の数多くの演奏会やCD録音に参加し、現在もソリストおよびコーラス主要メンバーとして活躍中。1999年、クラウディオ・モンテヴェルディ作曲「聖母マリアの夕べの祈り」でソリストデビュー。2002年、ソプラノ歌手の鈴木美登里を中心に声楽アンサンブル「ラ・フォンテヴェルデ」を結成し、16世紀～17世紀のイタリアで流行したマドリガーレの演奏と普及に努めている。2017年、ソリストのみのアンサンブルによるJ.S.バッハのカンタータ全曲演奏を目標に「カントゥス・エーブリウス」を結成。その他、鈴木秀美主宰「コーロ・リベロ・クラシコ」主要メンバー。

佐野 正一（さのまさかず／バス）

東京藝術大学卒業、同大学院修了。卒業時、宮中にて御前演奏を行う。日伊声楽コンコルソ第２位、日仏声楽コンクール第２位。日本音楽コンクール二度入選。奏楽堂日本歌曲コンクール奨励賞。二期会公演『ファルスタッフ』フォード、宮本亜門演出『コシ・ファン・トゥッテ』『椿姫』、小澤征爾指揮『フィガロの結婚』（演奏会形式）他、長年、数多くのオペラ、コンサート、宗教曲のソリストとして活躍する。海外では、NYのカーネギーホール、ウィーンの楽友協会他、全17回、『感動の第九』のソリストとして出演する。ホテル椿山荘東京でのディナーコンサートも20年目を迎える。NHK・FM土曜リサイタル、名曲コンサートに出演。数多くの団体の合唱指導、ヴォイス トレーナーを行い、その的確でわかりやすく、楽しい指導には大変定評がある。尚美学園大学、聖徳大学講師。さいたまシティオペラ副会長。日本演奏連盟、日伊音楽協会、日本フォーレ協会、二期会、各会員。

東京バッハ・カンタータ・アンサンブル（管弦楽）

東京バッハ・カンタータ・アンサンブルは東京芸術大学の学内サークルとして、小林道夫氏の下で活発な演奏活動を続けてきた「芸大バッハ・カンタータ・クラブ」のOB・OGを中心に、卒業後もカンタータの演奏を続けようと有志が集まり、1977年に発足しました。メンバーは各自がソリスト、室内楽、オーケストラなど各方面で活動しているため、多少流動的ですが、活動開始からすでに30数年を経ており、バッハやヘンデル等のバロックからハイドン・モーツアルトの古典、メンデルスゾーン、ブラームス、ドヴォルザーク等のロマン派、さらにはフォーレ、プーランクといった近代、現代のものまでレパートリーを広げています。その演奏はいずれもが様式感に則った生き生きとしたもので、共演した各合唱団、指揮者から高い評価を得ています。過去においては、ヴェルナー、ヤーコプ、H.ヴィンシャーマン、H.J.ロッチェ、ペーター・ノイマン、G.クリストフ・ビラー、小林道夫、八尋和美など内外の指揮者をはじめ、横浜合唱協会をはじめ日本各地の合唱団と共演しています。横浜合唱協会とは19年にわたって共演を続けており、今回は15回目になります。

公式ホームページ：http://www.tokio-bach-kantaten-ensemble.com/

＜本日の出演者＞

第１ヴァイオリン：川原　千真（コンサートマスター）、三輪　真樹、大谷　美佐子、高木　聡
第２ヴァイオリン：花崎　淳生、小田　瑠奈、片桐　恵里　／　ヴィオラ：深沢　美奈、鈴木　友紀子、新井　豊治
チェロ：小貫　詠子、西海　朱音　／　コントラバス：寺田　和正　／　フルート：立川　和男、勝俣　敬二
オーボエ：庄司　知史、鹿又　寒太郎　／　クラリネット：河端　秀樹、及川　豪
ファゴット：井上　直哉、一二三　麻衣子　／　トランペット：平井　志郎、高丸　智子
ホルン：大貫　ひろし、加治　祐子　／　トロンボーン：橋本　勇太、佐藤　学、末次　孝規
ティンパニー：畑中　暢行　／　オルガン：圓谷　俊貴

曲目解説

今回取り上げました「バッハを継承した二人の若き天才」のモーツァルトとメンデルスゾーンには多くの共通点が知られています。まずはそのいくつかを見てみましょう。

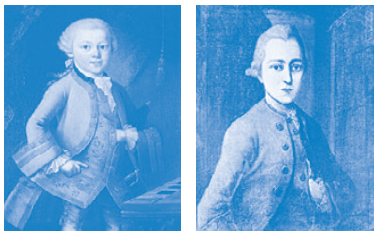
・なんといっても有名なのはその“神童ぶり”です。

モーツァルトの“神童ぶり”は物語や俗説さらに映画にもなっていて様々な形で伝えられています。1762年、わずか6歳でウィーンのシェーンブルン宮殿においてオーストリアの女帝マリア・テレジアへの御前演奏を行い感嘆されています。その翌年7歳で作曲した3曲の“ソナタ”が出版され、さらにその翌年にはなんと“交響曲第1番変ホ長調”を作曲しています。一方メンデルスゾーンも幼少時から作曲、ピアノ演奏等で才能を発揮し、10代の作品“弦楽八重奏曲　変ホ長調”や序曲”夏の夜の夢”は、現在においても音楽会の人気レパートリーになっています。

・とても残念なことですが二人とも30代で“夭逝”しています。

モーツァルトは35歳という若さで、見舞いに来ていた親しい歌手たちと共に“レクイエム”の完成部分を試唱したりするうちに昏睡状態になり、息を引き取ったと伝えられています。一方メンデルスゾーンは、ライプツィヒではゲヴァントハウスの指揮者、ベルリンでは大聖堂音楽監督を務め、イギリスからは音楽祭用の“エリア”等の委嘱を受け、指揮と作曲で多忙を極めるなか、脳溢血により38歳という若さで世を去りました。

・二人とも巨匠“ゲーテ”と出会っています。


モーツァルト7歳 ／ ゲーテ14歳

メンデルスゾーン12歳 ／ ゲーテ72歳

この二人の天才とは対照的に長寿で時代の生き証人となったドイツを代表する文化人、文豪ゲーテ（1749～1832）は、14歳の時に当時7歳のモーツァルトと、そして72歳の時には12歳のメンデルスゾーンと出会っています。後年ゲーテは“7歳のモーツァルトの演奏”について語っています。また、モーツァルトはゲーテの詩「すみれ（Das Veilchen）」に作曲した歌曲（K.476）を残しています。一方メンデルスゾーンは12歳の時、作曲の師匠で、ゲーテと親しかったツェルターに連れられて2週間ほどワイマールに滞在しました。この滞在中、ほぼ毎日ゲーテに請われ、邸宅で“彼のリクエストの曲や自身の即興曲”をピアノで見事に弾いて聴かせ、ゲーテから“神童”と感嘆されました。

・創作上最も重要なのが“バッハの音楽との出会い”です。

生まれ故郷のザルツブルクからウィーンに移ったモーツァルトは、ベルリン大使時代にバッハの楽譜を蒐集しオーストリアへ持ち帰ったオーストリアの外交官・スヴィーテン男爵の許でバッハの音楽に出会い、“創作上の転機”を迎えました。この影響は甚大なもので、モーツァルト研究家のアルフレート・アインシュタインは“創作上の一大危機であった”と分析しています。一方、少年期からバッハの音楽に親しんでいたメンデルスゾーンは1829年20歳の時、バッハの“マタイ受難曲”の写譜を祖母からプレゼントされ、それに魅せられ、師ツェルターらの反対を押し切って、約100年間忘れられていた“マタイ受難曲”をベルリン・ジングアカデミーで復活上演し、音楽史に大きな足跡を残しました。 しかしながら、その後24歳の時、本命視されていたジングアカデミー合唱団指揮者選挙でユダヤ人であることが影響して敗北するという挫折を経験し、ベルリンを去りました。

・本日演奏する作品の共通点は二作品とも新妻に捧げた曲です。

コンスタンツェ ／ セシル

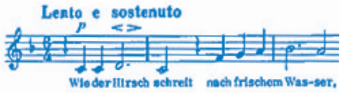
モーツァルトは1782年コンスタンツェとウィーンで結婚し、翌1783年に彼女を連れて故郷のザルツブルクの両親の元を訪れました。この時、聖ペテロ教会へ“ミサ曲ハ短調”を奉献し、新妻のコンスタンツェのソプラノ独唱、自身の指揮で初演を行いました。一方メンデルスゾーンは新婚旅行中の幸せの中で作曲を始め、完成した“詩篇42番”を愛妻セシルに献呈、1838年1月1日ゲヴァントハウスで自身の指揮で初演を行いました。

◆ F. メンデルスゾーン『詩篇42番　鹿が谷川の水を慕い求めるように』 op.42（1837／38）

この詩篇は七つの曲で構成されています。どの曲もグレゴリオ聖歌のような平易で誰もが口ずさみたくなるメロディを素材にして、『神を渇望するものの、神から見放され深く苦悩する中で神を見出した喜び』を親しみ深いカンタータに仕上げています。

第1曲　合唱　ヘ長調（F-Dur）　6／4拍子　レント

オーケストラ前奏に続いて、アルトが「鹿が谷川の水を慕い求めるように」（譜例①）と“神への渇望”を静かに歌い始め、ソプラノ、テノール、バスへと続きます。



（譜例①）第1曲：「鹿が谷川の水を」

第2曲　アリア　ニ短調（d-Moll）　2／4拍子　アダージョ

オーボエと美しく掛け合いながらソプラノ独唱が「わが魂は神を慕う」と歌います。

第3曲　レチタティーヴォとアリア・合唱　イ短調（a-Moll）　6／4拍子　アレグロ

ソプラノ独唱が“神から見放され涙にくれている”と嘆きます。

第4曲　合唱　ヘ長調（F-Dur）　4／4拍子　アレグロ

男声合唱が「わが魂よ、なぜ悲しむのか」（譜例②）と“神の不在”を問い、女声合唱が「神を待ち望め」と掛け合い応答します。

第5曲　レチタティーヴォ　ト短調（g-Moll）　6／8拍子　アンダンテ

ソプラノ独唱が「わが神よ、わが魂は悲しんでいる」と“神の不在”を訴えます。

第6曲　五重唱　変ロ長調（B-Dur）　2／2拍子　アレグロ・モデラート

男声合唱が「主は昼にその慈愛を約束された」（譜例③）と過去の佳き日を回想しますが、ソプラノ独唱は「わが神よ、わが魂は悲しんでいる」と厳しい現状を訴えます。

第7曲　終結合唱　ヘ長調（F-Dur）　4／4拍子　荘厳に

第4曲と同じ男声合唱が「わが魂よ、なぜ悲しむのか」（譜例②）と苦悩を吐露、次に2／2拍子のヴィヴァーチェとなり全合唱による「神を待ち望め」（譜例④）の動機が神を思い出させます。さらにテンポを速め、「神を待ち望め」の動機を「主を賛美せよ」と新しい歌詞（譜例⑤）に付け替えて、“深い苦悩の中で神を見出した喜び“を壮大なフーガが展開し、曲が締めくくられます。

（譜例②）第4曲：「なぜ悲しむのか」

（譜例③）第6曲：「主はその寵愛を」

（譜例④）第7曲：「神を待ち望め」

（譜例⑤）第7曲：「主を讃美せよ」

◆ W.A. モーツァルト『ミサ曲　ハ短調　Messe c-Moll』K.427（1783）

モーツァルトは彼のザルツブルク時代（1768～80年）に、教会音楽家として15曲以上のミサ曲を作曲しましたが、これらはいずれも演奏時間などに制約を受けていました。一方この“ミサ曲ハ短調”は教会の束縛を受けず個人的な誓約で自発的に作曲されました。そして完成されることはなかったのですが、1783年10月25日に既作のミサ曲の一部を転用してザルツブルク聖ペテロ教会にて初演されました。本日の演奏はモーツァルトの意志をできるだけ反映しつつ一部を補足した新モーツァルト全集版（エーダー版（1986））で行います。まずモーツァルトによって完成されている「キリエ」「グロリア」楽章を見てみましょう。オーケストラ、特に低音部が曲の特徴、性格を明瞭に表していますので譜例を記しました。併せてご覧ください。

Ⅰ．キリエ　合唱と独唱　ハ短調（c-Moll）　4／4拍子　アンダンテ・モデラート

オーケストラの下降する分散和音前奏（譜例①）を受けて、ソプラノが上昇分散和音を荘厳に奏でて始まります。

Ⅱ．グロリア楽章は8つの部分に分けられています。

<グロリア> 合唱　ハ長調（C-Dur）　4／4拍子　アレグロ・ヴィヴァーチェ

一点の曇りもない純正なハ長調の主和音が歓喜のリズム（譜例②）で鳴り響く“グロリア”で始まり、“天の栄光”を讃える力強いフーガが続き、“地には平和”ではpに急変して聴き手を惹きつけます。

<ラウダムス・テ> 独唱　ヘ長調（F-Dur）　4／4拍子　アレグロ

主を讃えるソプラノの華やかなコロラトゥーラによるアリアです。

<グラツィアス> 五声合唱　イ短調（a-Moll）　4／4拍子　アダージョ

一転して、不協和音、激しい転調、厳しい付点リズム（譜例③）による畏怖の念が偉大なるものへの深い感謝を表現しています。

<ドミネ・デウス> 二重唱　ニ短調（d-Moll）　3／4拍子　アレグロ・モデラート

ソプラノ二重唱によって“父なる主”、“父の御子”、“神の子羊”　が対位法的に繰り返し強調されます。

<クイ・トリス> 八声二重合唱　ト短調（g-Moll）　4／4拍子　ラルゴ

この曲でグロリア楽章の頂点に達し、半音下降するオスティナート・バス（譜例④）が執拗に繰り返される中、不協和音、厳しい付点リズム、fとpの強烈な対比により神に強く哀願し、憐みを乞います。

<クオニアム> 三重唱　ホ短調（e-Moll）　2／2拍子　アレグロ

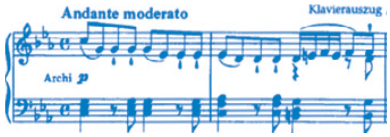
あなたは唯一の神聖、あなたは唯一の主、あなたは唯一の至高者と各独唱が歌いだし、その後は三者一体で同じ歌詞を三重唱します。

<イエス・クリステ> 合唱　ハ長調（C-Dur）　4／4拍子　アダージョ

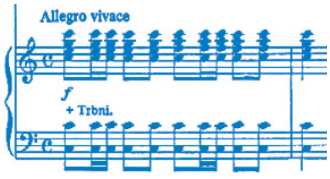
特別に短く切り出されたイエス・キリストへの呼びかけが全合唱と全オーケストラが総動員されて荘重に響きます。（譜例⑤）

<クム・サンクト・スピリトゥ> 合唱　ハ長調（C-Dur）　2／2拍子

グロリア楽章を締めくくるのは力強く堂々としたフーガ（譜例⑥）で、モー



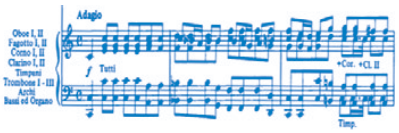
（譜例①）キリエ：下降分散和音



（譜例②）グロリア：歓喜のリズム

（譜例③）グラツィアス：厳しい付点リズム

（譜例④）クイ・トリス：半音下降オスティナート・バス



（譜例⑤）イエス・クリステ：荘重なトゥッティ

（譜例⑥）クム・サンクト・スピリトゥ：フーガ　テーマ

ツァルト最後の交響曲“ジュピター”の最終楽章の宇宙的なフーガ（譜例⑦）を彷彿とさせます。

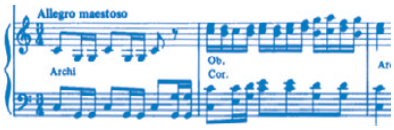
この後のクレド楽章以下では完成された部分が少なくなります。

（譜例⑦）“ジュピター”フーガ

Ⅲ．クレド楽章

冒頭<クレド>五声合唱　ハ長調（C-Dur）　3／4拍子　アレグロ・マエストーソ

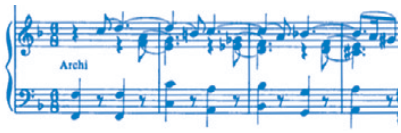
<グロリア>の冒頭と同じく歓喜のリズム（譜例⑧）を弦と管が交互に繰り返して開始します。これを伴奏として合唱が信仰告白を力強く歌います。



（譜例⑧）クレド：歓喜のリズム

<エト・インカルナートゥス> ソプラノ独唱　ヘ長調（F-Dur）　6／8拍子

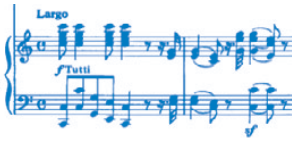
舞曲風リズム（譜例⑨）に乗って「イエスが処女マリアから聖霊によって受肉された」と歌う魅力的なコロラトゥーラ・アリアです。



（譜例⑨）エト・インカルナートゥス：舞曲風リズム

Ⅳ．サンクトゥス楽章　二重合唱　ハ長調（C-Dur）　4／4拍子　ラルゴ

序奏的な<サンクトゥス>を三唱（譜例⑩）した後、<オザンナ>の二重合唱フーガに突入します。



（譜例⑩）<サンクトゥス>序奏

Ⅴ．ベネディクトゥス　四重唱・二重合唱　イ短調（a-Moll）　4／4拍子　アレグロ・コモド

「主の御名によって来たもの」への祝福の四重唱が歌われ、最後に<オザンナ>二重フーガが圧縮して再現され全体を締めくくります。

アニュス・デイ楽章はまったく作曲されませんでした。

フラット系主体の“ミサ曲ハ短調”の調性構成にモーツァルトの強い自己主張が現れています。

・フリーメーソンの象徴である（♭♭♭）が主たる調性

ハ短調というフラット3つ（♭♭♭）のフリーメーソン音楽を象徴する調性で<キリエ>が始まり、コンスタンツェが独唱で登場した“クリステ・エレイソン”で平行調の変ホ長調（♭♭♭）に転じます。次の<グロリア>は同主調で一点の曇りもない純正なハ長調へと「闇から光の世界」へのフリーメーソン的変遷の世界を描きます。その後、フラット1つのヘ長調<ラウダムス・テ>、調号なしのイ短調<グラツィアス>、フラット1つのニ短調<ドミネ・デウス>と変移し<クイ・トリス>に達します。なお、“フリーメーソン”とは中世に寺院や宮殿を建てた“メーソン（石工）組合”を起源とした「人道主義を基調に自己完成、人類共同体を目指す思想結社」ですが、国や流派によっても様々に展開されました。

・頂点の<クイ・トリス>はフラット2つのト短調

中央に置かれた<クイ・トリス> はモーツァルトの短調を論ずるとき必ず引き合いに出されるト短調（♭♭）です。（彼はこの調で交響曲や弦楽五重奏で強い悲劇性の名曲を生みだしました。）この様に<クイ・トリス>までずっとフラット系の調性が続きました。<クオニアム>のみシャープ系になりますが、最後はハ長調で結ばれます。

・フリーメーソン思想に取り囲まれていたモーツァルト

モーツァルトは1784年にフリーメーソンに加入しましたが、若い時からフリーメーソン思想に取り囲まれていました。ドイツ・オーストリアでのフリーメーソン思想はキリスト教に古代ギリシア学芸思想が合わさったヨーロッパ的神学・哲学と根源を共有するもので、当時の知識人、芸術家、政治家に深く浸透していました。フリードリヒ大王～ヴィルヘルムIV世までのプロイセン国王、C.Ph.E.バッハ、ゲーテ、ツェルター、スヴィーテン伯爵等のフリーメーソンの思想の中にモーツァルトも居合わせていました。

フリーメーソン儀式（右端がモーツァルト）

・♯系のバッハの“ミサ曲ロ短調”vs♭系のモーツァルトの“ミサ曲ハ短調”

このように♭系によるモーツァルトの“ミサ曲ハ短調”は、バッハの“ミサ曲ロ短調”が♯系のロ短調（♯♯）（十字架・受難）とニ長調（復活）を対比させて“ルター的キリスト教の核心”を描いたのに対し、♭系のハ短調（♭♭♭）（闇・試練）と変ホ長調（光・愛）を対比させた“フリーメーソン的キリスト教の核心”を描き、この点でもバッハの“ミサ曲ロ短調”と双璧を成しています。

・どうしてこの大曲“ミサ曲ハ短調”は未完で終わってしまったのでしょうか？

「モーツァルトは次期シュテファン大聖堂楽長が約束されていて、宗教音楽の新しい様式研究に注力し、とりわけ典礼ミサに相応しい簡潔なミサ作曲に注力していた。従って長大な“ミサ曲ハ短調”の完成は目下の注力点ではなかった。」と、残された自筆断片を分析した研究者は語っています。しかし、バッハも大曲の“ミサ曲ロ短調”を一気に作ったのではなく、サンクトゥスは39歳（1724）、キリエ、グロリアは48歳（1733）、クレド以下は最晩年の1748/9年に作曲しました。もしモーツァルトが長生きしていたら、「晩年にバッハに倣って“ミサ曲ハ短調”を完成させようとした」と信じたいところです。

解説：藤井良昭

横浜合唱協会

横浜合唱協会は、J.S.バッハ声楽作品の本格的な演奏を目指して、1970年に発足したアマチュア合唱団です。これまで、指揮者の八尋和美氏、山神健志氏をはじめ、充実した指導陣の下で演奏活動を行ってきました。レパートリーはバッハを中心に、シュッツやメンデルスゾーン、ブラームスなどバロックからロマン派のドイツの合唱音楽をメインとして近年ではイギリスのバロック音楽、F.マルタン、アルヴォ・ペルトなどの近・現代の作品へも活動の幅を広げています。今日では合唱ワークショップを企画し、外部との交流や、楽曲へのより深い理解のもとで演奏を行うという新しい取り組みが始まっています。また、1997年から4回を数えるドイツ演奏旅行を経て、昨年10月にはドイツ・ライプツィヒ市を拠点に活動するアミチ・ムジケ・ライプツィヒ（amici musicae Leipzig）を横浜に迎えて交流演奏会を行いました。創立50周年にあたる2020年には、5度目のドイツ演奏旅行とドイツでのアミチ・ムジケとの交流（合同演奏）を計画しています。

正 会 員

[ソプラノ]

平鹿　諭子　飯島　純子　新谷　暁　須賀　由美　魚本　充子　山田　都　志村　知子
高田　文子　古宮真紀子　青柳　敦子　広庭　恵美　河野　敦子　渡部　園美　中村さえ子
土田　紀子　北村千恵子　北原　規子　小野　早苗　田口千佳子　柏屋麻里子　岡　聡美
小川　美奈　石川　歩　片野　実莉

[アルト]

新井千鶴子　堂﨑　律子　大杉　純子　中野　理子　馬岡　洋子　岩附美知子　山本久美子
藤井美智子　中山　典子　水越　淳子　鈴木理絵子　保田　康子　松村千佳子　堂﨑　直美
志水　弘美　大石むつみ　高橋　直子　相馬美津恵　関口　葉子　矢吹世紀代　中西　敦子

[テノール]

藤井　良昭　堂﨑　浩　馬岡　利吏　清水　光洋　岡田　亮介　長谷　雅信　柏屋　弘
岩間　昌史　今田　勝之　前田　羊一　三宅　史朗

[バス]

新井　隆士　大石　康夫　飯島　龍哉　天ケ瀬圭三　山田　直樹　松田圭一郎　若狭　保弘
平鹿　一久　長島　茂　関根　健史

維 持 会 員

伊藤　邦子　気賀沢忠文　竹村　重雄　梅津　実可　中山　元子　武田　サヨ　柴田　秀男
山岡　千秋　佐久間貴美　安広　百代　中西　牧子　藤井可奈子　松下　孝　佐々木聰子
吉崎　桂江　友田　晃利　鈴木　園子　林　雅子　柏　聡子　久保　祐子　村木誠一郎
西連寺利絵　入澤　洋子　鈴木　康司　小野沢　誠　魚本　一司　平井　聡子　平井　透
石川　鮎子　笹井　平　吉川由里子　国分エリ子　小見山雄次　雀部　征宜　鳥山　純一
津守　滋　土井美智子　森岡　剛　白石　洋子　日沖　憲司　本多　志織　加藤　拓朗
松田　久美　山口　綾規　岡崎　希枝　恒吉　理美　森岡　美紀　山田多佳子　長谷川由里子
木村　美保　市川　純也　太田　明子　川越　信彰　新井　光恵　小田　稔　柏木梨重子
飯島　幸子　前田　佳子　大塩　亜季　古根香菜子　和久井一男　松本惠太郎　露木　正樹
荒井　直子　松尾　裕子　和田　京子　長尾　里美　土井　賢一　今城　明美　田島　京子
市川　浩子　古根　正治　安積　和彦　小山　正嘉　那須比奈子　木村　仁一　堀内　陽子
栃木　真紀　田川　正浩　谷口幸一郎

横浜合唱協会ホームページ　http://www.ycs.gr.jp

表紙：モーツァルトが“ミサ曲ハ短調”を初演したザルツブルクの聖ペテロ教会